鎮守の森だより

NPO法人社叢学会ニュース

第121号

2023年1月7日

社叢で生物多様性保全に取り組む年に

NPO法人社叢学会理事長・皇學館大学名誉教授

櫻　井　治　男

会員各位には、新たな年を穏やかに迎えられたこととお慶びを申し上げます。新型コロナウイルスが蠢くといいますか、跋扈跳梁するなか、各地の「お正月」風景はいかがであったのか気にはなりますが、時間はリセットされ一年が始まりました。

昨年は、本学会にとり大小いくつかの動きがありました。まず、3年ぶりに通常形式(総会・研究発表・シンポジウム・見学会)の大会を埼玉県秩父市の秩父神社で開催することができ、大きな励みとなりました。諏訪大会・太宰府大会と続いてきたなか、令和2・3年度は規模縮小、そして4年度は鶴首していた対面での出会いが成就されたことで、大会を実行して下さった薗田稔理事長、塩谷崇之理事のご尽力に改めて感謝するところです。

一方、総会では役員の交代が諮られ、これまで学会のためにリーダーシップを発揮してこられた薗田理事長、糸谷正俊・渡辺弘之副理事長が退任され名誉顧問・顧問の立場として、引き続き会員として本会を導いて下さることとなりましたが、内心動揺する大きな動きでした。

また、関東・中部・関西・九州各地区における世話役の理事を決めていただき、例会活動を進めるとともに、6月24日(土)には富士山本宮浅間大社(富士宮市)を会場に大会を、25日はエクスカーションを行なう計画で、中部地区の岡村穣理事に奔走いただき準備を開始しています。さらに、社叢インストラクターの養成、社叢見守り隊の活動など、これまで行われてきた各事業を引き継ぎつつ、アフターコロナを見据えた展開を図る必要も生じています。

新たな取り組みとして、環境省の「2030年までに陸と海の30%以上を自然環境エリアとして保全する」という目標達成に向けた「生物多様性のための30by30アライアンス」に当会も参画することとなり、森本幸裕・前迫ゆり副理事長を中心に検討を行なっていただいています。その目標の鍵として鎮守の杜、社叢の存在はOECMの観点から大きな意義を有します。そのためにも、理事および会員の方々が分担執筆下さった「鎮守の森の過去・現在・未来 ―そこが知りたい社叢学」(『神社新報』連載記事)を纏めた書籍が、前迫副理事長の牽引力でまもなく刊行されることに期待しています。会員の皆様には是非その広まり(購入販売)にご協力いただければ有難く存じます。

ところで、「30by30アライアンス」のロゴは蛙の化身だそうです。夫婦岩で知られる伊勢市二見浦に鎮座する二見興玉神社には蛙のオブジェが随所に置かれています。伊勢参りから「無事に帰る」という祈念が籠もると言われますが、二見から鳥羽・志摩地域へかけてはリアス海岸となり「鮑」など海産物の産地です。しかしながら黒潮大蛇行の影響や海水温の上昇で藻場が減少し、磯によっては海女漁ができない深刻な被害が続いています。神宮の森を流れる養分豊かな川の水が、伊勢志摩の海の命の「若返り」に少しでも役立つことを願い、夫婦岩の間に現れる霊峰富士の姿を年初めに拝みたいと思います。

年次総会は6月24日(土)・25日(日)に富士山本宮浅間大社で！

シンポジウム　基調講演に川勝平太静岡県知事

第90回　関西定例研究会　報告

2022年11月26日
（於　賀茂御祖神社公文所）

近江の社叢と文化的景観

～比良山麓と奥永源寺の事例から

講　　師：深町加津枝（社叢学会理事・京都大学准教授）

地域の営みと防災・減災　地域社会の中で神社の位置や、神社がどのような意味を持っているのかを、景観という観点から見ると同時に、地域の営みが防災・減災に関わっていることを調査するために、「人口減少時代における気候変動適応としての生態系を活用した防災その評価と社会実装」というプロジェクトを立ち上げ、災害に対処してきた具体的な姿を古文書や絵図の調査、また地域民からの聞き取りを行った。そこから、地域にある大事な自然をうまく生かしていくことが防災減災につながっているということがわかってきた。

こうした伝統的な取り組みは日本だけではなく、海外からも注目され、国連大学や世界銀行などの関係者たちが、発展途上国で大プロジェクトや多額の資金がなくてもできる防災減災ということで関心を寄せている。

比良山麓の暮らしと災害　比良山麓は京都から1時間もあれば行ける場所で、広域的に見ると、位置的には日本海側と太平洋側のちょうど真ん中で琵琶湖のすぐ近く。様々な街道が通る。周辺には1,000mくらいの山々が重なり、冬にはここだけが雪をかぶる急峻な地形で、土砂災害が起こりやすい。その災害にどのように対処し、どのように暮らしを成り立たせてきたのだろうか。

絵図などを見ても、いかに平良山脈が急峻で、すぐに人の暮らし、水辺があるという場所であることがわかる。湖岸は扇状地で比較的緩やかだが、300mぐらいから一気に等高線が狭まる。地質は主に花崗岩だが、南側は堆積岩になる。

田の真ん中に山の神様が祀られていることがあるのだが、何故山の神が田の真ん中にあるのだろうか。集落には山仕事で暮らしを成り立たせている人がいて、集落から山に向かって山仕事の無事を朝な夕なに祈っていたという。通常、田んぼの真ん中に祠などがあると日陰になるので避けるのだろうが、集落と山を結ぶ大事な場所で、ここの木はむやみに伐ってはいけないという。実際に邪魔な大枝を伐り、事故で大けがをしたという話があり、樹木が大事にされている。

どういう場所にこうした森があり、どんな意味を持っているのかに非常にも関心があるのだが、これらを防災減災という視点から考えてみたい。田に引かれる水の源や、あるいは災害の記録を辿っていくとそこに神社がある事例が多い。

被害を軽減させる知恵と工夫　急峻な山から琵琶湖への水路は非常に変動する。こうした中で湖や山の恵みは頂きたいが、災害は避けたいということで、様々な工夫を凝らしている。地域民の話や史料から、どこでどのような災害が起きたかという履歴を重ねていくと、災害が何回も起こった所があるのだが、そういう場所は同時に、歴史的、あるいは自然の豊かさで魅力ある所であることも多い。土石流に対しても歴史的にどこから発生してきたかがわかるが、人々が非常に工夫をして、対処しようとしてきた知恵などがわかる。

例えば集落の背後にシカやイノシシを防ぐ石で組んだシシ垣があるのだが、これは山と村との境になり、シシを防ぐと同時に土石流の被害が軽減される役割も果たしている。また、金毘羅神社には長五郎岩と呼ばれる大きな岩があり、正月には必ず供え物をし、参拝する。この岩が大きく出っ張っていることによって土石流が流れてきたときに、村を直撃しないで流れていくということを50～60歳代の人は伝え聞いている。

村には六人衆や八人衆といわれる神社の氏子組織があり、水の分配や共有林の管理を担っている。こうした人々は定期的に山に作業に入るなど、地域全体をよく理解し、役割分担をしながら管理してきた。神社も、隣の集落との境界に山の神様を祀るなど、社会的な境界とかを考えるときにも大事な場所になっている。

昭和になり、燃料としてのマツの需要が高まった時にも、土石流の流れをある程度の大きさまで受け止める事ができる大きな松は伐らないために、村の共有林として所有している。また、神社には純常緑樹の大きな木があり、夏でも涼しく、子供もよく遊んでいる。

少なくとも昭和の初期ぐらいまでは、道と水のネットワークが巧みに配され、集落で水害が起こりそうな時には捨て川といい、いざとなったらわざと流す水路なども作ったりして工夫をしてきた。

神社の祭礼も自然状況に応じて斎行される。例えば金毘羅神社の例祭は3月にあるが、この頃はまだ雪が残っていることもある。雪で閉鎖されて参拝できない時のために里宮を作り、場合によってはこちらで例祭を行うということもしている。

次回予告【第38回中部定例研究会】

◆日　時：2023年2月6日(月)　13:30～
◆場　所：熱田神宮神宮会館集合（名古屋市熱田区神宮1-1-1）
◆内　容：正式参拝、多賀顕権宮司挨拶の後、多賀顕権宮司の挨拶と高橋守営繕部長の説明を聞きながら社叢を拝観

第9回社叢インストラクター資格認定試験問題

2022年11月27日　伏見稲荷大社にて実施

筆記試験Ⅰ　提示された課題について事前に指定の字数で記述し、当日提出　配点＝100

論文1　社叢とは何か。考えるところを述べなさい（1,000字程度）

論文2　社叢はその面積にかかわらず、長い時間のなかで人々が守り、育ててきた森林である。今後、世界的潮流のなかで生物多様性としての機能を発揮する森としてもその存在はますます重要になると考えられる。しかし社叢が抱える課題も多くある。社叢が抱える課題について述べたうえで、社叢を管理するうえで重要なことについて、下記のキーワードを使用し、1,000字以上で論じなさい。なお、理論ではなく、実際の社叢をとりあげ、できるだけ具体的に述べられたい。またキーワードには下線を引くこと。

キーワード：地域、植生、神木、社殿、人、植物名(具体的に3種以上記載)、社叢の役割、課題、管理、未来

筆記試験Ⅱ【14:30～15:30】配点=100

次の文章を読み空欄に入る最もふさわしい語句を①～㊱より選びなさい。解答は番号で記入しなさい。

神社には祭神を祀る社殿(本殿)が有る場合と無い場合とがある。後者には、奈良県のＡのように山がＢとも言われ信仰の対象となっている場合がある。こうしたタイプの山は一般にＣとも称される。一方、社殿(本殿)が構えられている場合には、その建築様式に特徴が見られ、「何々神社」は「何造り」として知られるところでもある。そうした例を伺うと、伊勢神宮のＤ、Ｅのような「大社造り」、徳川家康を祀るＦはＧとして知られるし、古代の有力氏族であるＨのＩである奈良市の春日大社は「春日造り」と言い、合掌家屋のようにＪで屋根に大きな前廂の付く独特の様式となっている。

①鹿島神宮　②北野天満宮　③大神神社　④日光東照宮　⑤日吉大社　⑥出雲大社　⑦宗像大社　⑧厳島神社 ⑨霊場　⑩磐座　⑪神体　⑫神籬　⑬高天原　⑭神奈備　⑮御嶽　⑯里山　⑰権現造　⑱鰹木造　⑲明神造　⑳寄棟造　㉑神明造　㉒源氏　㉓平氏㉔藤原氏　㉕橘氏　㉖物部氏　㉗忌部氏　㉘産土神　㉙護法善神　㉚鎮守神 ㉛氏神　㉜垂迹神　㉝平入　㉞箱入㉟妻入　㊱壺入

2.　竹林が社叢に侵入・拡大している事例がよくみられる。この問題点について述べた下文を読み、カッコ内にもっとも適当な用語をいれなさい。

近年、二次林、自然林あるいは河畔林に竹林が侵入・拡大しており、森林に大きな影響を与えているが、社叢においても同様の問題が生じている。拡大している竹の種類は主に食料となる(ア)や竹製品に利用される(イ)、ハチクなどである。これらは、もともと、人の利用や護岸のために植栽されたものが多い。その後、竹が利用されなくなったことによって、竹を間引いたり、伐採するなどの(ウ)がなされなくなり、拡大が進行している。

竹が森林内に侵入し、桿密度が高くなると、林床のみならず、高木層の光条件も悪化し、植物の(エ)作用を阻害し、草本層から高木層にいたる植物が枯死する。したがって、放棄竹林の生態的問題は、森林の(オ)を著しく喪失させることにあるといえる。社叢の場合には、面積が狭いために、この傾向が一層顕著となるため、竹林の(ウ)が不可欠である

3.　つぎのなかから、社叢との関係で問題だと思うものをふたつ選び、その課題の番号と解決策などについて考えるところを50字程度で述べなさい。

①　ゴミ、ペットの糞などの放棄　②　野良猫・野犬の住処、カワウなどのコロニー化　③　管理不十分のため夜間等の不適切利用や放火の危険性増大、防犯面で問題　④　スギ・ヒノキ等の植林による自然性の低下

4.　街中に残された社叢を保全するための以下について、適切なものに〇、不適切なものに×をつけなさい。

①社叢の所有者である神社と氏子が責任をもって社叢の保全を図り、市民団体等の神社関係者以外は責任体制があいまいになるので、参加や協力の申し出は基本的に拒否する。

②良好な環境や自然景観を提供する社叢は、地域社会にとっても重要な場所となるので、神社側も普段から市民団体や地元自治会等と連携して自然学習会や清掃活動等を行う。

③地元自治体には、政教分離の原則から、社叢保全のための協力依頼は行わない。

④行政が社叢の一部を保存樹林や保存樹指定等の規制を行う場合、神社側に指定後の保全義務が生じるだけで、管理助成もわずかであるので、できれば行政に責任をすべて持ってもらい、神社側は指定地以外の社叢を保全管理する。

⑤社叢は神社の所有物であっても、周辺地域に良好な自然環境や自然景観を提供するなどの公益性を持っているので、行政や市民団体等と連携して、社叢を守る。

⑥自治会等の地域団体は、社叢についての理解が不十分であることが多いため、社叢保全活動等の社叢への関与は控えていただく。

⑦公益性が評価されて社叢保全のための規制が行われた場合、保全義務は所有者である神社側に発生するが、この公益性を持続させるための各種方策は、指定権者である行政と密に協力しながら行うのが有効である。

⑧社叢は、日照障害、落ち葉被害、台風時の倒木等をもたらす危険性が高いため、近隣の民家等に接する社叢は伐採して緩衝帯を設ける。

⑨社叢はすべて重要な神事の場所であり、基本的に自然観察等の利用は避けるべきである。

⑩台風による倒木などで隣接する住宅の被害が想定される社叢区域については、樹木の危険度を調査するなど科学的方法で対応策を講じ、むやみに帯状に伐採するなどの短絡的な方法は避ける。

5.　神事と植物の関係について200字程度で記載しなさい。

石を使う　土石流で流されてきた石を上手に使うと、恵みにもなるし災害対応にもなる。例として大きな百間堤がある。江戸時代の構造物で、これを配置をすることによって下流側にある集落や田んぼを守る役割を果たしてきた。高さ5mもあるような大きいものだが、ほぼ人力で積み上げて作られている。上部は、石だけの所もあるのだが、下流側では少し小ぶりの石組になり、そこに松が植えられていた。これは燃料や材木にもなるのだが、同時に木があることによって土石流を止めることができるなど、防災減災上も大事だったということが、聞き取りでわかってきた。また、石を積んだ内側に4月には水をためて砂を沈下させて農業用水にするという場所にもなる。川の流れが合流する場所には弁財天神社があり、そこの小さな池で、山からの水を一旦受け止め、いくつかに分けて集落に流すということをしている。

また、シシ垣は集落を取り囲むことによって、ここで土石流を抑える防災減災対策ともなってきた。

豊かな石の文化　この地域の石の文化の紹介していくが、司馬遼太郎は『街道をゆく』の旅を、湖西の北小松という比良山の山裾から始めている。氏が大阪・京都方面から高島の方へ行こうとする車中から見えた、石を組んだひなびた湖の波伏せが、民芸品のように見えて、それが気になって車を降りたことから、ここがスタートになったということだ。

まず湖岸には波除があるのだが、これは波を受けるだけではなく、湖からの洪水を防ぐためのしくみでもある。また、石で作った洗濯場もあり、湖岸の家には石積みがある。山にはシシ垣があり、山から引いてきた水は、石でできた小さな水路で集落を巡り、そこから水を引いて生活の場として、炊事場のような形で使ったりする。今ではコンクリートになってしまった所もあるが、ちょっとした階段など、細かい所で石を利用している。

住宅の石垣を見ると、堆積岩を積み上げている所と石工が加工した花崗岩で出来ている所がある。北小松へ行くと穴太積みも見ることができる。棚田も石を組上げているし、水路の橋にも石を使っている。庭先に上部が平らな守山石を敷き詰めて農作業場にしている家もある。

石で鳥居を作る技術を持った石工もいた。南小松の八幡神社には地元出身の石工である甚八が作った石像としては日本最大とも言われる狛犬がある。京都などの庭園にある石灯籠には嘉兵衛灯籠と呼ばれるものがあるが、名工西山嘉兵衛の手になるもので、こうした名工を輩出している。

このように山から崩れてきた岩・石は湖西地区での生活のいたるところに利用されると同時に、独特の文化的景観を作っている。

忘れ去られる防災・減災の知恵　川を生活に使ったり、あるいは災害対応に利用するということは、江戸時代には行政が全てやってくれるわけではなく、地域の人々がこの地形全体をきちんと知った上で、自分たちで行わなければならないという時代だ。災害を防ぐために大事なのだろうという所には神社があり、そこの空間をうまく使いながら防災をしてきたのだろう。こうしたものは残念ながら、ほとんど忘れられている。我々のプロジェクトの中でこうした例を見ることができたのだが、こうした事例は多分、色々な所にあるのだろうと思う。

また、こうした地域に受け継がれてきた防災・減災の取り組み・知恵は、今の行政の仕組みにはほとんど位置づけられておらず、この価値については公の施策にはほとんど活かされていない状況がある。

しかし、実際に石組みなどを見ると、防災の観点からやはりこれがあることは大事だし、地域の歴史や伝わってきた考えも大事だろう。そういったものをもっと大事にしていきたいと思いながら調査を続けている。

景観生態学会という国際学会で、イギリスの研究者と連携しながら、イギリスと日本の事例がどう違うのかを、お互いに聞き合いながら発表したが、海外の事例を見ると、自分の足元で当たり前にしていることがより見えてきて、こうした鎮守の森、社叢、里山の文化的景観を大事にするのはどうしたらよいのかを考えるきっかけにもなった。

滋賀県の神社と鎮守の森　滋賀県の鎮守の森の分布の調査がある。数としては全部で1,300ほどで、そのうちほとんどが天然林・自然林に近い所は28ヶ所ぐらいだが、二次林を含むもののあまり人が手をつけていない森が多くあるという報告をしている。大きさを見ると、3haより大きいものが3%、0.5ha未満が15%ということで、あまり大きくはないのだが、広くに分布している。比良山系ではどこにあるのか見ると、地形的には湖岸、扇状地で平らになってきている所、さらに山が立ち上がる境界と、山の水を最初に引くような場所となる。

実際の現場を見てみる。例えば樹下神社と比良天満宮はそれぞれ２つの部落の境界にある神社で、入口にスダジイの巨木が聳え立ち、湖岸の交通量の多い県道からもよく見える。中に入っていくと隣接して1つのまとまった森をつくっており、タブを中心とした自然林の構成種がまざる森の一角を占めている。

山の神をまつる神社が集落に一つはあり、多くはまとまった森の一画にある。その近くには水をとる場所もあり、シシ垣があり、山の入り口になったりもしている例もある。一方で開けたところにもぽつりとある神社もあり、湖岸の神社は大きな森になっていないことが多い。集落の境界のある神社は、面積はそれほどないのだが、鳥居がひときわ印象的だ。

祭は場所の意味を伝える　場所ごとに様々な意味があることを感じさせる形の祭・年中行事がある。

山が始まる要衝にある山の神を祀る行事が11月と1月にある。どんどを組んで、朝６時に火をつける。この行事のために、八人衆が事前に枝を伐ったり、柴を用意したりする。正月には正月の飾り物を持ってきてそこで燃やす。八人衆は当屋(＝当番)の家に集まり、少しご馳走いただいてから行事に臨む。60歳になった新しい人が入ってくると、最年長の人が引退する。

また、5つの集落が集まって斎行する五箇祭もある。5月5日に神事があり、神輿が出たのだが、1基1ｔ以上あって、昔は石の仕事をしていたり、山仕事をしていたりで、体力がある人、担ぎ方を知っている人が多くて練ることができたのだが、今では力を使う仕事が減っているし、部落を出て京都や大阪で働いていたりで、

この時だけ帰省して来る人が増えた現状では難しくなっている。こうした形でどんどんと行事のあり方が変わってしまうのだが、5つの集落が神輿を持って決まった道を通って集まり、一緒になって山と里の境界にある神社から浜に下がっていき、収穫を祈る、また代々続いていくことを願う。これも、こういう祭をやることによって、それぞれの場所の意味を感じさせる祭だ。中には織田信長が比叡山を攻めた時に、運び出した神輿だという謂れを持つ神輿もある。

どうすれば守れるのか　こうした鎮守の森などをどう管理するかということだが、年中行事に関わったり、森に木を植え継いで行くようなことをしながら地域の人々が関わってはいるのだが、場所の意味や行事がなくなっていく現状は否定できない。普段ほとんど関わらない人が多かったり、新住民が入ってきて、元々60軒だったのが300軒になっていたりするのだが、新住民が氏子になることはないので、別々の世界にいるという形になっている。

そういう中で、変えてしまって元には戻せない状況も生まれている。例えば圃場整備などで、道標であったり、こんもりした森であった場所も、その意味が伝わらずに完全に伐られてしまうということが起きる。たまたま我々の調査をしている中でも、景観がどんどん変わっていって、工事の作業員に聞くと、森を全て伐ってしまうということがわかり、慌てて地域の人々と協力しながら残してほしいという要望をだし、何とか小規模ながら残したこともある。

湖西地区地図（びわこビジターズビューローHPから）

北小松から高島に行くときに通る道筋に、石の地蔵が並んでいる所があり、岩除け地蔵と言われている。道は急峻で、このような所を通らざるを得ない道を守っているという場所だ。今でもここを通ると、独特の雰囲気があり、本当に良いなと思うのだが、このすぐ後ろを湖西バイパスが通ってしまい、木も随分伐ってしまい、全く雰囲気が違ってしまっている。何か隠しておくべき大事なものを一気になくしてオープンにしてしまうというようなことが行われ、非常に残念な気持ちになった。

また、北小松でも、神社の参道のちょうど真ん中をバイパスが通るということで、いかに公共事業が、当たり前にあったものを一気に変えてしまうのか。まずは今日話をしたように、神社があるところ、石を使う所にはそれぞれに、様々な理由があるのだということを理解した上で、これから活動などをしてほしいと願っている。

★　2面の修正

左段：21行目　「雪をかぶる」→かぶりやすい
右段：16行目　「シシを防ぐ」→獣害を防ぐ
　　21行目　「50～60歳代の」→地元の年配の
　　23行目　「水の分配」→神事
　　28行目　「昭和になり」→削除
　　31行目　「純常緑樹」→常緑樹（「純」を削除）

社叢インストラクター資格認定試験を実施

11月227日（日）、社叢インストラクター養成セミナーに併せて実施された資格認定試験に2人が受験し、論文試験・短答試験・面接試験に臨んだ。

book　book book　book book book

神宿る隣の自然
上甫木　昭春・押田　佳子・上田　萌子・大平　和弘　編著
PHPｴﾃﾞｨﾀｰｽﾞ･ｸﾞﾙｰﾌﾟ　定価2,200円＋税

街のそこここで小さな祠や祀られた樹木を見つけることができる。時にお供え物があったりして、近隣の住民などが守り伝えていることがうかがえる。こうした身近にある「神」を、社会や都市化による変化を踏まえて実地調査が重ねられた。

鹿児島のモイドン、八重山のウタキ、奄美大島のノロ祭祀の現状と課題を報告する一方で、阪神地域の社寺、東京都心の小さな神社、大阪市内の道路に残された聖なる樹木など、都市化にさらされる「聖地」を紹介。これらの祭祀の場が、現代社会にどのような役割を持つのかを考察する。

本学会に関係の深い研究者たちが「祭祀一体の緑から地域の健全な暮らし方を探る」興味深い1冊となった。

30by30アライアンスに参加

OECMとしての社叢の保全・管理に役割を果たす！

１面で櫻井理事長が紹介した通り、本学会は環境省が主導する「30by30アライアンス」に参加することとなった。

2021年6月に英国で開催されたG7サミットで、「G7 2030年自然協約(G7 2030 Nature Compact)」が合意されたが、これは、2030年までに生物多様性の損失を食い止め、反転させることを目標としている。わが国も、その達成に向け、自国の陸域・海域の少なくとも 30%を保全・保護することを約束した。

同年8月には環境大臣が「30by30 基本コンセプト」を発表、国立公園などの保護地域の拡充等に加え、保護地域以外で生物多様性の保全に資する地域(OECM：Other Effective area-based Conservation Measures)を設定することで、2030年までに我が国の陸と海の少なくとも30%を保全・保護する目標(30by30)を達成することとしている。

そこで、30by30の達成に向けた主要な取組となるOECMの設定・維持管理の推進に向けて、各種団体による取組が不可欠だとして、「生物多様性のための30by30 アライアンス」が設立された。

環境省では生物多様性の価値を有する社寺林や庭園等、文化的な経緯として保全されてきた場所をOECM登録するために、関係団体との連携の可能性について検討を進めており、当学会では、予てよりこの動きに注目してきたが、この度、いち早くアライアンスへの参加を申請、認められた。

今後、社叢をOECMとするための国内認定である「自然共生エリア」への申請支援や社叢の保全・管理を担う社叢インストラクターの養成事業の充実、社叢見守り隊の強化などで、実践的に30by30の達成に協力していく。

事務局から

● 謹んで新春のお慶びを申し上げますとともに、会員の皆さま方のご健勝をお祈り申し上げます。昨年この欄に今年こそは平安にと書きましたが、２月には思いもしなかった戦争が勃発し、世界のエネルギー事情、食糧事情が激変しました。現地では自然環境も大きな被害を受けております。戦争こそが環境破壊、地球温暖化の最大の原因なのではないでしょうか。

また昨年は、欧州や米国での熱波に伴う大規模な山火事に震撼させられましたが、何よりも豪州での山火事で重度の火傷を負ったコアラの悲鳴が耳についてはなれません。人間のあくなき欲望に自然が怒りを表しているのでしょうか。

社叢保護や適正な管理が緑豊かな地球を守ることにつながるという確信のもと、少しづつであっても着実に力を尽くしてまいる所存です。今年も変わらず、種種ご協力賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

● 令和5年度年次総会は富士山のふもと、富士山本宮浅間大社で6月24日(土)・25日(日)に開催いたします。多くの湧水の源となる富士山についてその自然環境や文化的価値、未来に向けてのあり方を議論するシンポジウムでは、基調講演に川勝平太静岡県知事に登壇いただけることになりました。見学会ではさすがに富士山頂上の奥宮等拝とはいきませんが、周辺の浅間神社や白糸の滝など、充実した内容にするべく、準備を進めております。詳細は次号以降になりますが、奮ってご参加くださいますよう、お願いいたします。

編集後記

W杯といえば、来年はおフランスでラグビー！秘かに現地観戦を画策、公式ツァーなるものを見てみた。はっ？　現地ホテル集合解散、4泊5日でほぼ45万円って。これに飛行機代と開催都市までの交通費もかかるのでしょうが！　45万円あれば、飛行機も入れて2週間ぐらいは滞在できるんじゃね？

しかもこれが完売御礼って、どうよ。一緒に行こうぜっ！　と盛り上がったトモダチは、飛行機つきの10日くらいで45万円ならまだ許せる(ワタシは許せん!!)けど、それならば、そのお金で良いTV受像機を買って家でTV観戦する！　ってさ。

ホテル代も上がるだろうし、そもそも取れるのかい？　既に戦意喪失。。。私も大人しくTV観戦かぁと思いつつ日本リーグのニュースを眺めていると、何と！　南アのデ・クラーク(あの金髪の、ちっさいと言っても170cmあるヒト)がキャノンにいるではないの。おっきな人の突進も迫力があって凄いのだけれど、何といってもちっさい人がおっきな人を振り回すってのがええのよ。　(藤岡　郁)

発行人　社叢学会事務局　〒604-8115　京都市中京区雁金町373番地みよいビル303号
TEL・FAX 075-212-2973
URL http://www.shasou.org　E-Mail　shasou@ams.odn.ne.jp
facebook　https://www.facebook.com/shasou
社叢学会関東支部　〒368-0041　秩父市番場町1－1　秩父神社社務所内
TEL080-1514-5032　E-Mail　shasougakkai@hotmail.com